

国語学者・岩淵悦太郎と「平家」

斎藤達哉

1. はじめに

稿者は、平成24（2012）年以降、国語学者・岩淵悦太郎の収集にかかる和装本の一群（約250タイトル。以下、岩淵文庫と称する）の整理・調査を行ってきた。

本稿では、その中から「平家」（平家物語・平曲）に関する旧蔵書8種について、書誌と特徴を紹介するとともに、それらの収集意図を手掛かりにして岩淵悦太郎のライフワークの一端を明らかにする。

2. 岩淵悦太郎の国語史研究

岩淵悦太郎（1905.12.14～1978.5.19）は、福島県白河市^{（注1）}に生まれ、東京上野に育った。静岡高等学校在学中に東條操の「国語概説」の講義を受けたことで国語学に興味をもち、東京大学文学部に学んだ。

卒業後は、橋本進吉博士のもとで東京大学助手をつとめ、大阪高等学校教授、第一高等学校教授、東京女子高等師範学校教授を歴任。国語史^{（注2）}（とくに室町時代以降の国語音韻史）の研究者としての道を歩んだ。この時期の研究成果の大部分は、晩年に『国語史論集』（1977年、筑摩書房）としてまとめられている。

しかし、岩淵は国立国語研究所の創設に関わったことを境に音韻史研究者としての性格を次第に薄めていくことになる。昭和24（1949）年、岩淵は初代所長・西尾実らに乞われて、国立国語研究所（以下、研究所と略記）の創立と同時に研究第一部長として入職した。日本語の歴史的な研究よりも現代語の研究に力を注ぐという同研究所の性格から、この転籍は岩淵曰く「かなりの決心を必要とした」ものであったという^{（注3）}。さらに、岩淵は西尾実の後を承けて研究所第2代所長に就任することになり、共同研究による現代語（言語生活）

の研究体制固めに尽力することになる。この時期の岩淵の様子は、林（1978）に詳しく語られている。象徴的なのは、岩淵の追悼文で柴田（1978）をして「私が国語研究所である」と評せしめる猛烈ぶりが発揮されたことである。

岩淵は、こうした姿勢によって、研究所在職中には日本語を取り扱った一般向けの書籍を数多く著したものの、音韻史研究の業績は少なくなっていくた。

3. 「平家」に対する学問的関心とその契機

岩淵文庫を内容別に整理すると、韻書、声明、謡曲、平家（平家物語・平曲）、往来物、近代文法書の類が目をはく。

なかでも、「平家」（平家物語・平曲）は、量的には少ないものの、他にない写本を多く含んでいるという点で資料価値が高い。

岩淵悦太郎の平曲に対する学問的関心は、東京大学在学中からすでに始まっていた。昭和5（1930）年の卒業論文に「国語史資料としての平家物語語り本の研究」というテーマを選んでいるし、昭和17（1942）年には平曲を資料にした音韻に関する論考「平曲における入声ツの取扱ひ方」を発表している。この論考は、東京大学が所蔵する青洲文庫旧蔵の『平家正節』を主たる材料として調査を行ったものである。

岩淵が、音韻史の資料としての平曲の有用性に着目したのには、恩師・橋本進吉の影響が大きい。岩淵は、「平曲における入声ツの取扱ひ方」に、「橋本先生の御好意によって、三上代山師の前田流平曲を聞く機会が与えられた事がある」と記している。

また、橋本進吉著作集第6冊に収められた「国語音声史の研究」（昭和2年度の東京大学での橋本進吉の講義案）は、岩淵の筆記したノートを底本としたものである。そこでは平曲が音韻（音声）資料として不可欠な資料の一つであることが語られている（注4）。

浄瑠璃であるとか、平曲・謡曲の語り方、謡ひ方、仏教に行はれる声楽であるところの声明、その外、経文の読み方、その他狂言の言葉などに於て現に行はれてゐる発音も、亦過去の日本語の音声の研究する資料として欠くべからざるものである（26ページ）

こうしたことから、岩淵文庫の平家物語・平曲の写本・板本の収集は、遅くとも研究所入職前から始められていたと考えられる。

4. 岩淵悦太郎収集の「平家」

① 平家物語《無刊記本》

編著者不明 出版者不明

刊年不明 整板本 12巻12冊 28.0×19.5cm 線装

一：43丁、二：48丁、三：42丁、四：42丁、五：38丁、六：31丁、

七：40丁、八：34丁、九：51丁、十：44丁、十一：48丁、十二：43丁

本書は、題箋が全巻欠損しているが、内題に「平家物語 第一」～「平家物語 第十二」とある。刊記はないが、「漢字片仮名交じり」で記された元和板系の本文を持つ板本（流布本）である。

② 平家物語《万治2年刊本》

編著者不明 大和田九左衛門

万治2 [1659] 整板本 12巻12冊 26.6×19.2cm 線装

一：43丁、二：48丁、三：42丁、四：42丁、五：38丁、六：31丁、

七：40丁、八：34丁、九：51丁、十：44丁、十一：48丁、十二：43丁

本書は、題箋が「平家物語 第二」「平家物語 第三」……とあるが、第一、第九、第十二の題箋は欠損している。内題に「平家物語 第一」～「平家物語 第十二」とある。

上記①に紹介した板本と同一の版面、本文、丁数であり、やはり、元和板系の改刻か模刻と思われる。唯一、①の本と異なるのは、刊記が存在することで、「萬治貳巳亥曆仲秋上旬 大和田九左衛門板」と刷られている。

本書には、本文の各所に朱筆で区切り点が振られているほか、刊記の年号左に「昭和四三年ヨリ遡り／三百九年前」と、岩淵とは別人の筆跡^(注5)で朱書傍記されている。このことから、この書は昭和43（1968）年以降の入手と見ることができる。

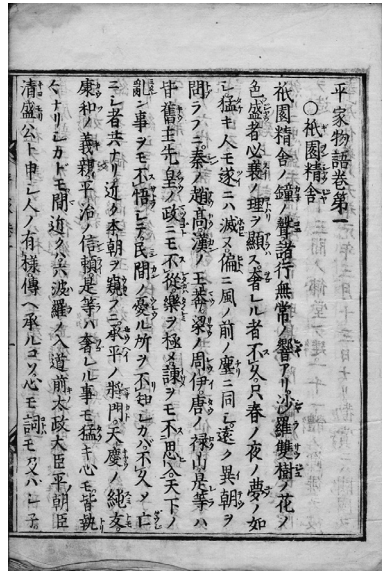
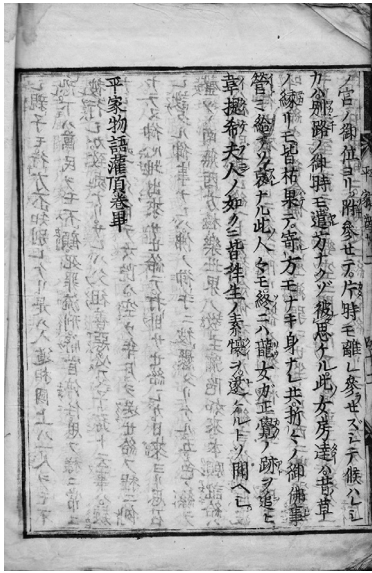


図1 ①『平家物語』《無刊記本》の本文冒頭及び巻末

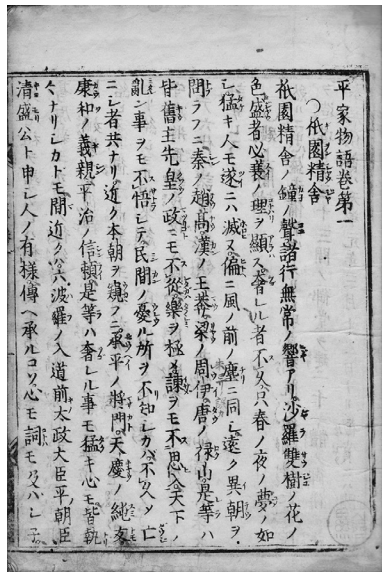
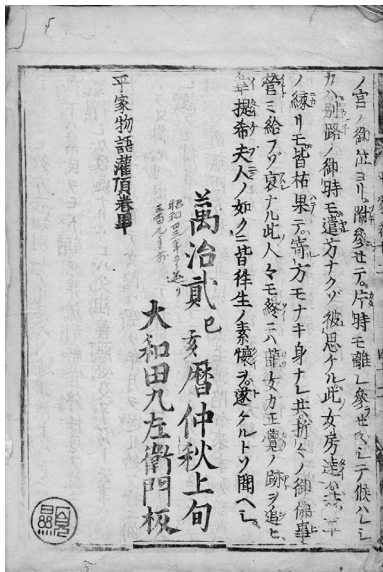


図2 ②『平家物語』《万治2年刊本》の本文冒頭及び巻末

③ 平曲吟譜《岩淵本》

岡村玄川／撰

元文3 [1738] 写本 4巻4冊 24.0×17.4cm 線装

春：79丁、夏：65丁、秋：76丁、冬：91丁

国書総目録に掲載あり

本書は、不精庵嘘静・岡村玄川（1691～1772）の撰にかかる前田流平曲の譜本で、「春」「夏」「秋」「冬」の4冊で構成される。題箋は、「戊申 平曲吟譜 大全 春」～「戊申 平曲吟譜 大全 冬」。跋に「元文三年 不精庵嘘静」とある。表紙は、緑地に金糸を用いた錦の布貼り。冬巻の巻末に「大日経金剛頂経蘇悉地経ヲ……」の書き込みと「平家正節……」の朱書貼紙がある。冬巻の巻末に、「文行堂 平曲吟譜 四冊 六円」の書肆商票が貼られている。

各巻の内容は、次のとおりである（表紙裏の目録による）。

- (春) 赦文、蹉蛇、御産卷、少将都還、有王、医師問答、大臣流罪、城南離宮、巖島御幸、山門牒状、南都牒状、返牒、橋合戦、宮御最期、鶉、三井寺炎焼
- (夏) 竹生嶋、木曾願書、実盛、木曾山門牒状、山門返牒、連署願書、主上都落、維盛都落、聖主臨幸、忠度都落、経正都落、青山、一門都落、福原落、那都羅、宇佐行幸、太宰府落
- (秋) 小朝拝、宇治川、木曾最期、二度魁、敦盛、浜軍、落足、小宰相、請文、戒文、海道下、千寿、横笛、高野卷、熊野参詣、維盛入水
- (冬) 嗣信最期、奈須與一、弓流、雞合、先帝御入水、内侍所都入、腰越、大地震、重衡被斬、土佐坊被斬、六代乞受、八十三句灌頂 女院御出家、大原入御、大原御幸、六道、御往生

平家物語の前田流の譜本の一つに、岡村玄川撰の『平家吟譜』が存在するとされてきたが、平成19（2007）年に12巻で構成される完全な写本「宮崎文庫記念館蔵本」が発見されるまで、長らくその全貌は不明であった。本書は、『平家吟譜』の抄出本（4巻構成）である。岩淵によっていち早く学界に紹介された写本で、昭和27（1952）年の「平曲の語り本」に「十余年前に入手」した旨の記述があることから、昭和10年代に書肆・文行堂から購入したものと思われる。

る。

本書については、岩波日本古典文学大系『平家物語 上』（1959）の解説（58ページ）にも前田流の平曲譜本の一つとして挙げられているほか、村上光徳、奥村三雄が調査を行っている。

村上光徳による調査は、昭和40年代に行われている（村上（1969））。村上は、その後の調査で、弘前図書館石見文庫蔵『平志吟譜』と「1頁の行数、1行の字数、譜ともに」一致し、「岩淵氏ご所蔵の『平曲吟譜』のお手本と弘前図書館蔵の『平志吟譜』のお手本は同じであるということが言えるのではないか」（103ページ）と報告する（村上（1994））。なお、村上・鈴木（2007）にいう「岩淵本」も本書のことである。

奥村三雄による調査の年代は定かではないが、著書の記述を追うかぎりでは、岩淵存命中の調査であった（奥村（1981））。

④ 平家物語《高楷訪月本》

高楷訪月／撰

享和3 [1803]～文化2 [1805] 写本 12巻24冊 23.5×16.3cm 線装
一上：52丁、一下：71丁、二上：76丁、二下：73丁、三上：71丁、
三下：60丁、四上：70丁、四下：57丁、五上：58丁、五下：54丁、
六上：42丁、六下：49丁、七上：64丁、七下：62丁、八上：46丁、
八下：54丁、九上：75丁、九下：91丁、十上：63丁、十下：58丁、
十一上：67丁、十一下：68丁、十二上：47丁、十二下：42丁

国書総目録に掲載あり

本書は、前田流平曲譜本で、24冊で構成される。柿渋色表紙で、外題は表紙中央に「平家物語 一之上」～「平家物語 十二之下」と直接墨書されている。内題はなく、各巻頭に目録が掲げられ、目録の右下に「天地堂印」の朱印がある。用箋の柱に「舒嘯齋」、「一上」の表紙貼紙に「高楷訪月自筆本」と墨書、跋に「享和三癸亥春書始メ 文化二乙丑三月十四日記シ終 法橋高楷舒嘯齋行年六十五歳」とあることから、享和3（1803）年から文化2（1805）年にかけて、高楷舒嘯齋（訪月）によって記された肉筆本ということになる。著者の

高樞舒唱齋は、前田流の平曲を学び、寛政12（1800）年に平曲譜本『平語小曲』2冊を刊行している。本書は、その後に著わされたもので、『平語小曲』と比べて大部である。薦田（2011）によると、『平家小曲』は線状譜を用いているとのことである。稿者は『平家小曲』を未見であるが、研優社（2014）152ページ掲載の写真によって、「鱸魚」「卒都婆流」の一部を見るかぎり、本書と『平語小曲』との線状譜は必ずしも同じではない。

このほか、注目されることは、この書の巻末に大正15年11月付けの高野辰之（注6）の筆による次の識語が存在することである。

高樞舒唱齋また訪月ともいへり。或は京の人に
して医を業としたりしか。歿時卒年明ならず。
平語小曲二巻の著ありて寛政十二年に刊行せり。
橘春暉これに序していへり。

吾友高樞君亦好之、自前田檢校玉君師弟
相伝蓋八世云、故君亦自称前田流、君為人温
雅風流、好読古書、汎交時覽、於平語一枝最
竭力遂補欠正乱、可謂大成者焉、頃日又載字
語中音調文章最佳者一節、名平語小曲、其曲
数十集成二巻、以為学者之捷徑云々

といへり其の十二巻は平家正節が安永五年荻野檢校の手に大成せられたる後の写にして譜形略相似たり。想はくは荻野にも学びたりしならん。平語小曲の末に平曲之秘書と題して平家勘文録以下十種の名を載せ、右不彫刻貶置と附記し此の中に平家正節をも収めたり。平曲伝来系図また其の中にあり。正節大成後各一部二十四冊を作成して一々曲節墨譜を施したるは正節以外に抱負ありしを見るべく必ずや斯曲の蘊奥をきはめたるものなるべし。其の秘事と称するを収めざるは時流評さざるが為にして正節又之を欠けり

大正十五年十一月

斑山

高野辰之識 印

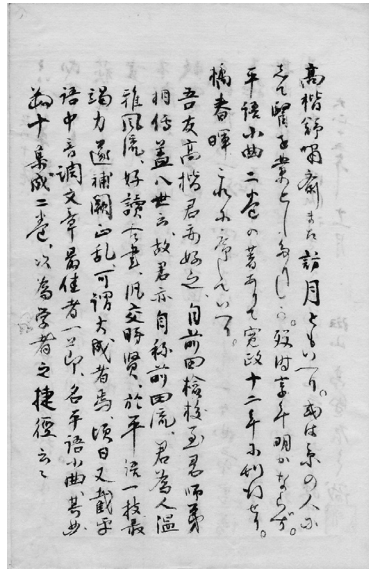
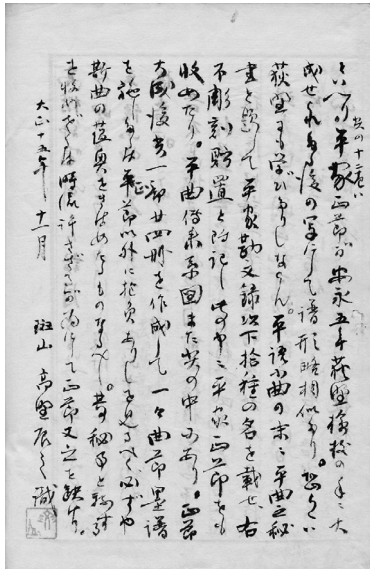


図3 ④『平家物語』《高樞訪月本》の高野辰之による識語

高野の識語は、萩野検校の『平家正節』（安永5（1776）年）が大成された後に、これだけ大部の平曲譜本が著わされたことに注目し、「必ずや斯曲の蘊奥をきはめたるものなるべし」と評している。

本書の構成は以下のとおりである。

- (卷一上) 一 殿上闇打、二 鱸魚、三 禿童、四 我身栄花、五 祇王
- (卷一下) 六 二代后、七 額打論、八 清水炎焼、九 殿下乗合、十 鹿ノ谷、十一 鶉川合戦、十二 願立、十三 御輿振、十四 内裡炎焼
- (卷二上) 一 坐主流、二 一行阿闍梨、三 西光被斬、四 小教訓、五 少将乞請、六 小松教訓
- (卷二下) 七 放火、八 新大納言被流、九 阿古屋ノ松、

十 新大納言死去、十一 徳大寺殿殿島詣、十二 山門滅亡、
 十三 善光寺炎焼、十四 康頼祝言、十五 卒都婆流、
 十六 蘇武

(卷三上) 一 赦シ文、二 蹉蛇、三 御産ノ巻、四 公卿揃、
 五 大塔建立、六 頼豪、七 少将都還、八 有王島下リ、
 九 埃風

(卷三下) 十 医師問答、十一 無紋沙汰、十二 燈籠、十三 金渡、
 十四 法印問答、十五 大臣流罪、十六 行隆沙汰、
 十七 法皇還幸、十八 城南離宮

(卷四上) 一 殿島御幸、二 還御、三 源氏揃、四 馳ノ沙汰、
 五 信連合戦、六 園城寺入御、七 競、八 山門牒状、
 九 南都牒状、十 南都返状

(卷四下) 十一 大衆揃、十二 橋合戦、十三 宮御最期、
 十四 若宮御出家、十五 鶉、十六 三井寺炎焼

(卷五上) 一 都還リ、二 新都ノ沙汰、三 月見、四 物怪、
 五 大庭逸馬、六 朝敵揃、七 咸陽宮、八 文覚強行、
 九 勸進帳

(卷五下) 十 文覚被流、十一 伊豆院宣、十二 東国下向、十三 富士川、
 十四 五節ノ沙汰、十五 都還リ、十六 奈良炎上

(卷六上) 一 新院崩御、二 紅葉、三 葵ノ上、四 小督、五 廻シ文、
 六 飛脚到来

(卷六下) 七 入道逝去、八 経ノ島、九 慈心坊、十 祇園女御、
 十一 洲股合戦、十二 喘涸声、十三 横田河原合戦

(卷七上) 一 北国下向、二 竹生罵詣、三 火燵合戦、四 木曾願書、
 五 俱利伽羅落、六 篠原合戦、
 七 実盛最期、八 幻房、九 木曾山門牒状、
 十 山門返状

(卷七下) 十一 平家連署願書、十二 主上都落、十三 維盛都落、
 十四 聖主臨幸、十五 忠度最期、十六 経正都落、

- 十七 青山ノ沙汰、十八 一門都落、十九 福原落
(卷八上) 一 山門御幸、二 名虎、三 宇佐行幸、四 緒環、
五 太宰府落、六 征夷將軍院宣
(卷八下) 七 猫間、八 水寫合戦、九 瀬尾最期、十 室山合戦、
十一 鼓判官、十二 法住寺合戦
(卷九上) 一 小朝拝、二 生唼、三 宇治川、四 河原合戦、
五 木曾最期、六 樋口被斬、七 六ヶ度合戦、八 三草勢汰、
九 三草合戦
(卷九下) 十 老馬、十一 一二ノ魁、十二 二度ノ魁、十三 坂落シ、
十四 盛俊最期、十五 忠度最期、十六 重衡生捕、
十七 敦盛最期、十八 浜軍、十九 落足、二十 小宰相
(卷十上) 一 頸渡シ、二 内裡女房、三 八島院宣、四 請文、
五 戒文、六 海道下リ、七 千寿前
(卷十下) 八 横笛、九 高野ノ巻、十 維盛出家、十一 熊野參詣、
十二 維盛入水、十三 三日平氏、十四 北方出家、
十五 藤戸、十六 大嘗会沙汰
(卷十一上) 一 逆櫓、二 勝浦合戦、三 大坂越、四 嗣信最期、
五 奈須與一、六 弓流、七 志度合戦、八 雞合、
九 壇浦合戦
(卷十一下) 十 遠矢、十一 先帝御入水、十二 能登殿最期、
十三 内侍所都入、十四 一門大路被渡、十五 文ノ沙汰、
十六 副将被斬、十七 腰越状、十八 大臣殿誅罰
(卷十二上) 一 重衡被斬、二 大地震、三 紺搔、四 平大納言被流、
五 土佐房被斬、六 判官都落、七 吉田大納言沙汰
(卷十二下) 八 六代乞請、九 泊瀬六代、十 六代被斬

なお、本書は、高野辰之の手元にあった時期に山田孝雄が調査しており、調査の結果は、山田（1933）に次のように紹介されている。

第一門 灌頂巻を別にしたるもの

第三類 一方譜本

第十類 一部の組織を立てたる譜本

(十九) 高楷訪月本 (高野辰之氏藏) 全二十四冊

平曲を嗜みし高楷舒嘯齋訪月の書写せしものにして、文化二年に成れり。平家一卷を上下二冊づゝに分ちたり。祇園精舎の文なく、灌頂卷なし。

また、③同様に、岩波日本古典文学大系『平家物語』(1959)の解説(上巻、58ページ)にも前田流の平曲譜本の一つとして挙げられている。

⑤ 平家物語《奥書なし》

編著者不明

書写年不明(近世) 写本 11巻22冊 24.3×16.5cm 線装
 二上：82丁、二下：101丁、三上：77丁、三下：91丁、四上：88丁、
 四下：87丁、五上：71丁、五下：73丁、六上：59丁、六下：65丁、
 七上：88丁、七下：75丁、八上：61丁、八下：69丁、九上：97丁、
 九下：110丁、十上：85丁、十下：87丁、十一上：98丁、
 十一下：94丁、十二上：61丁、十二下：56丁

本書は、平曲譜本で、「一上」、「一下」の二冊を欠く22冊で構成される。柿渋色表紙で、題箋はなく外題は表紙で左に「平家物語 二上」～「平家物語 十二下」と直接墨書されている。内題はなく、各巻頭に目録が掲げられる。

本書の構成は以下のとおりである。

(巻二上) 座主流、附 一行阿闍梨、西光被斬、小教訓、乞請、

(巻二下) 教訓、附 烽火、新大納言被流、阿古屋松、新大納言死去、
 徳大寺巖嶋詣、山門滅亡、康頼祝、卒都婆流、蘇武

(巻三上) 赦文、足摺、御産卷、公卿揃、大塔建立、頼豪、少将都還、
 有王嶋下

(巻三下) 僧都死去、金渡、廳、法印問答、医師問答、大臣流罪、無文、
 行隆沙汰、燈籠、法皇還幸

(巻四上) 巖島御幸、還御、源氏揃、馳沙汰、信連合戦、
 高倉宮／園城寺入御、競、山門牒状

- (卷四下) 南都牒状、南都返牒、大衆揃、橋合戦、宮御最後、
若宮御出家、鶴、三井寺炎上
- (卷五上) 都遷、新都沙汰、月見、物怪、大庭早馬、朝敵揃、
咸陽宮、文覚強行
- (卷五下) 勸進帳、文覚被流、伊豆院宣、東国下向、富士川、五節沙汰、
都遷、奈良炎上
- (卷六上) 新院崩御、紅葉、付 葵前、小督、廻文、附 飛脚到来
- (卷六下) 入道逝去、付 經嶋、慈心坊、祇園女御、洲勝合戦、
付 喘涸声、横田河原合戦
- (卷七上) 北国下向、竹生嶋詣、火燧合戦、木曾願書、俱利伽羅落、
篠原合戦、実盛最後、還亡、木曾山門牒状、返牒
- (卷七下) 平家連署願書、主上都落、維盛都落、聖主臨幸、忠度都落、
經正都落、青山沙汰、一門都落、福原落
- (卷八上) 山門御幸、那都羅、宇佐行幸、緒環、太宰府落、
征夷將軍院宣
- (卷八下) 猫間、水嶋合戦、瀬尾最後、室山合戦、鼓判官、法住寺合戦
- (卷九上) 小朝拝、生食、宇治川、河原合戦、木曾最後、樋口被斬、
六筒度合戦、三艸勢揃、付 三草合戦
- (卷九下) 老馬、一二懸、二度駆、坂落、盛俊最後、忠度最後、
重衡生捕、敦盛最後、浜軍、落足、小宰相
- (卷十上) 頭渡、内裏女房、八瀧院宣、請文、戒文、海道下、千手
- (卷十下) 横笛、高野卷、維盛出家、熊野參詣、維盛入水、三日平氏、
北方出家、藤戸、大嘗会沙汰
- (卷十一上) 逆櫓、附 勝浦合戦、大坂越、嗣信最後、那須與市、弓流、
志渡合戦、鷄合、壇浦合戦、遠矢
- (卷十一下) 遠矢、先帝入水、能登殿最後、内侍所都入、一門大路被渡、
文沙汰、副將被斬、腰越、大臣殿誅罰
- (卷十二上) 重衡被斬、大地震、附 紺搔、平大納言被流、土佐坊被斬、
判官都落、附 吉田大納言沙汰

(卷十二下) 六代、泊瀬六代、附 六代被斬

⑥ 平家物語 灌頂卷

編著者不明

書写年不明(近世) 写本 1巻1冊 24.3×16.5cm 57丁 線装

内容：女院御出家、小原入御、小原御幸、六道、御往生

本書は、平曲譜本である。柿渋色表紙で、題箋はなく、外題は表紙で左に「平家物語灌頂卷 全」と直接墨書されている。内題に「平家物語灌頂卷」とある平曲譜本で、上記⑤の22冊本と寸法、表紙、本文料紙、筆跡ともに同様である。このことから、⑤と伝来を同じくするツレであると推測される。

⑦ 平家物語 小秘事

編著者不明

書写年不明(近世) 写本 1巻1冊 24.3×16.5cm 14丁 線装

内容：善光寺炎上、延喜聖代、祇園精舎

本書は、平曲譜本である。柿渋色表紙で、題箋はなく、外題は表紙で左に「平家物語小秘事 全」と直接墨書されている。内題に「平家物語」とある平曲譜本で、上記⑤の22冊本と寸法、表紙、本文料紙、筆跡ともに同様である。このことから、⑤と伝来を同じくするツレであると推測される。

⑧ 平家詞曲伝記略

楠美晩翠／編輯、折笠儀正・津軽平八郎／校訂

明治16 [1883] 写本 1冊 23.5×17.1cm 15丁 線装

本書は、弘前における平曲の伝承者・楠美晩翠(1837~1887)が、明治16(1883)年に、同門の折笠儀正・津軽平八郎の協力を得ながら編纂した書で、江戸の前田流(吟譜系)と弘前藩への伝流について書き記している。

外題はなく、内題に「平家詞曲伝記略」と記され、序言に「徹齋蔵書」の印がある。本文は墨書で、随所に傍書訂正、貼紙訂正が見られる。

楠美晩翠の序言によると、当地の国学者・下澤保躬の求めに応じて作成し贈

るとあり、巻末に下澤保躬の跋文が綴じ込まれている。また、他の楠美家旧蔵本に見られる楠美印がない。こうしたことから、本書は、楠美晩翠の手元本ではなく、下澤に贈られた本か、下澤が書写したものかのどちらかであろう。

なお、鈴木まどか他（2007）中に『平家詞曲伝記略』の翻刻がある。鈴木翻

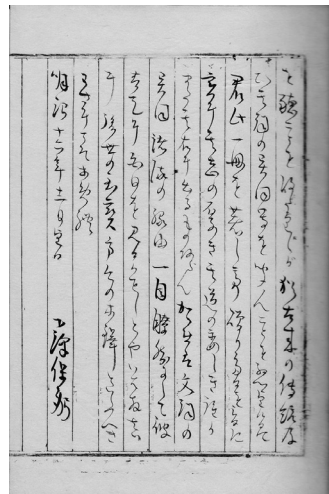
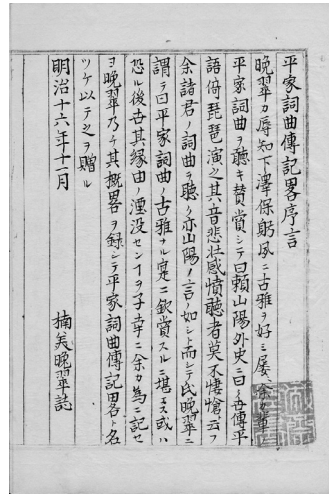
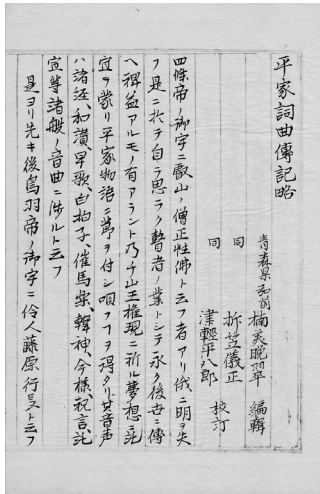


図4 ⑧『平家詞曲伝記略』
 左上：序言
 右上：本文冒頭
 右：下澤保躬跋文

刻は、館山家が所蔵するコピー（原本不明）を底本としたものとされるが、岩淵文庫本と比較して割注部分に校異が目立つ。

本書は、改装されて巻帙に収められている。改装の際、薄手の料紙（罫紙）による透けを防ぐための紙が入れ込まれた状態で綴じられている。いずれも、戦後に、古書肆によって加えられたものと思われ、岩淵の入手は研究所入職後であった可能性も考えられる。

5. 岩淵悦太郎の収集意図

5. 1. アクセント史資料として

岩淵悦太郎収集の平曲譜本は、音韻史（アクセント史）の資料として活用する目的で収集されたことは、疑いの余地がない。

③、④、⑤、⑥、⑦の平曲譜本は、現代の日本語学でも、とくにアクセント資料として活用される種のものである。

平曲譜本を用いたアクセント史研究は、橋本、岩淵以後は、『平家正節』を中心にして、奥村三雄^(注7)、金田一春彦^(注8)、上野和昭^(注9)らによって進められてきている。奥村（1981）では、次のように述べる。

アクセント史資料として見た平曲譜本は、前述の如く、ほぼ中世末～近世期頃の京都アクセントを如実に反映する訳だが、ここではむしろ、《中世語的性格の残存ともいうべき保守性と、近代京都語的な新しさがおりまざって認められる》事に注目すべきだろう（522ページ）

また、『平家正節』の場合、金田一（1997）は、「折声」という曲節は中世（南北朝時代）のアクセントを反映するものとする。

5. 2. 線状譜への着目

③、④、⑤、⑥、⑦の平曲譜本の譜の記載方法は、いずれも『平家正節』のような文字式だけではなく、線状譜を混ぜて記載されている。

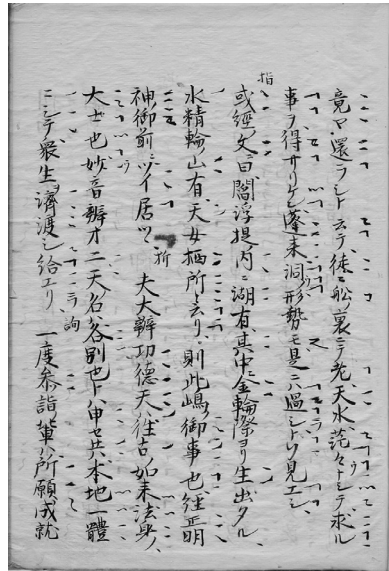
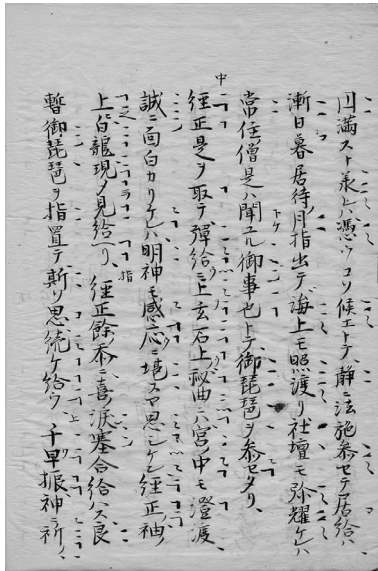


図5 ③『平曲吟譜』「竹生嶋」の折声に付された譜

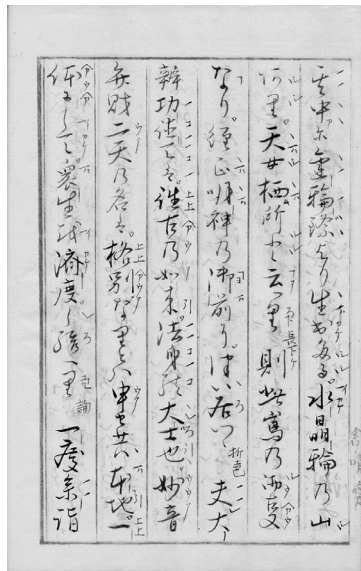


図6 ④『平家物語』《高樞訪月本》「竹生島詣」の折声に付された譜

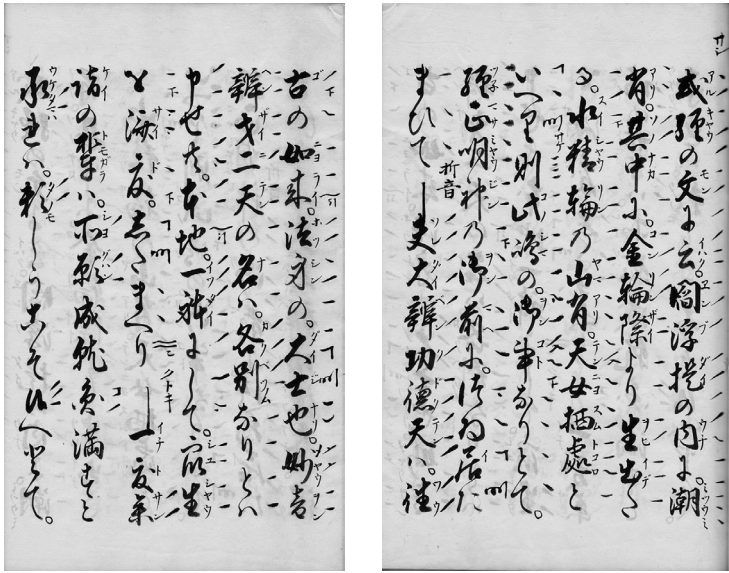


図7 ⑤『平家物語』《奥書なし》「竹生嶋詣」の折声に付された譜

譜の形式については、「仏教声明その他の邦楽関係譜本類等を考慮すれば、線状式ハカセの方が古い」(奥村(1991)、19ページ)とする説がある一方で、「文字・ことば」から「墨譜」へと「時間的に変化」したのだからことは、大筋で認めてよいと考えられます」(鈴木孝庸(2011)、94ページ)とする説もあり、どちらが古態を伝えるものなのかは、譜の外見だけでは判断できない。

岩淵文庫には、線状譜(ハカセ)が記載された仏教資料(高山寺旧蔵・平安初期写『法華懺法』、応永7[1400]写・五段式『舍利講式』など)や、声明、和讃に関する刊本が含まれている。岩淵が声明のアクセント譜との関連づけまでを含めた研究構想をもっていたことも十分に考えられる。

5. 3. 吟譜系への注目

岩淵悦太郎は平曲譜本のなかでも、名古屋に伝わった正節系ではなく、江戸に伝わっていた吟譜系に注目している。

- ・吟譜の成立が正節よりも早いこと

・文字式を採用する正節系と異なり、吟譜系は声明にも通じる線状譜を採用していること

などから、吟譜系を正節出現以前の語り本の姿を伝える資料として、あるいは、正節を補完する資料として見ていたのではないだろうか。

岩淵の「平曲の語り本」(1952)では、次のように記している。

吟譜は、平曲の語り方を知るのに貴重な資料のようである。その刊本が出て来ることを心から祈りたい

当時、平曲についての唯一の専門書であった館山漸之進『平家音楽史』(1910)では、吟譜が複数度紹介されるものの、その所在が不明であった。そんなところに、岩淵が吟譜入手の機会を得たことも研究意欲をかき立てるものであったことは想像に難くない。

なお、⑧は平曲譜本ではなく、弘前に受け継がれていた平曲の伝流について記したものである。弘前では吟譜系の平曲が受け継がれていた。したがって、⑧は、『平曲吟譜』の性格を知る上での側面資料として収集されたものであろう。

5. 4. 板本（流布本）をどのように用いたのか

さて、①、②の板本は、いわゆる流布本である。これらは、読むための平家であるためハカセの記載がなく、アクセント研究とは無関係に見える。

しかしながら、岩淵悦太郎は、やはり平曲資料を見るための必要からこれらを収集したと推察することができる面もある。

第一は、譜本間の遠近をはかる物差しとして用いられたのではないかということである。村上(1969)は、米沢図書館蔵の『平志吟譜』(通称A本)を紹介するなかで、「A本－平家正節－元和九年版本」の本文を三段表にして比較している。平曲譜本は、流布本と比べて章段数が少ないうえ、章段が前後や出入りが多い。岩淵は、平曲譜本が成立したのと同時期に流布した本を便宜上の基準にして、譜本間の遠近を見ようとしていたのではないだろうか。

第二は、加筆注記の確認のために用いたのではないかということである。平曲譜本には、人名(伝承していた検校らの名)を付した加筆注記が入ることがある。例えば、奥村(1981)は、京都大学蔵の『平家正節』において、人名に

混じって「板本」という注記が多いことが紹介されている（136～141ページ）。流布本の本文は、譜本の注記を理解するうえで不可欠であったとも考えられる。

6. 研究所入職後の「平家」との関わり方

岩淵悦太郎が、論考「平曲の語り本」を発表したのは、研究所入職後の昭和27（1952）年のことであった。しかし、その後は音韻史研究者としての性格を次第に薄めていった。本稿2節で述べたように、立場上そうせざるをえなかったのである。

その一方で、岩淵は平曲譜本の蔵書家として注目を浴びるようになった。岩波日本古典文学大系『平家物語 上』（1959）の解説（58ページ）では、上記③、④の平曲譜本が「岩淵悦太郎氏蔵」として紹介されている。

平曲譜本の所在が現在ほどに多くは知られていなかったということのほか、研究所の「研究第一部長」という岩淵の肩書が資料の信頼性を担保していた感も否めなかったようだ。岩淵は、平曲譜本を研究者たちに望まれると、惜しまずに閲覧させていた形跡が残っている。

たとえば、岩淵悦太郎が残した資料の中に、昭和44（1969）年頃、村上光徳から『平曲吟譜』閲覧に対する礼状とともに送られた『平志吟譜』（米沢図書館木村本）^(注10)の紙焼き写真（無線綴じで冊子に為したもの）が残っている。また、奥村三雄（1981）でも、生前の岩淵から『平曲吟譜』の調査を許可された旨が記されている。

さらに、上記④『平家物語《高樞訪月本》』に挟まれていた「平曲特別研究会展覧資料目録」も岩淵の活動を知る材料である。この目録は、B5サイズの藁半紙に謄写版刷りされたもので、昭和30（1955）年4月3日・4日付けである。目録中の第5番には上記③『戊申 平曲吟譜 大全《岩淵本》』が、第16番には上記④『平家物語《高樞訪月本》』が掲載されている。

平曲特別研究会は、中田（1955）・岸辺（1966）によると、東洋音楽学会・東京大学国語国文学会・国語学会の共催で行われたもので、昭和30（1955）年4月3日に「平曲研究会」（於：丸の内・日本工業倶楽部）、翌4日に「平曲講習会」（於：原宿・日本録音スタジオ）で行われたものである。展覧は、そ

平曲特別研究会展覧資料目録 (昭和三十年四月三日)

部号	種目	冊数	氏名	所蔵者
19	平曲時歌謡	1	天原ノ	
18	平曲時歌謡	1		
17	平曲時歌謡	2	寛政12	吉川英士氏蔵
16	平曲時歌謡	2	寛政3 1文化2	高野辰之氏蔵 岩間健太郎氏蔵
15	平曲時歌謡	1		金田一春彦氏蔵
14	平曲時歌謡	3		吉川英士氏蔵
13	平曲時歌謡	3		横道乃里理氏蔵
12	平曲時歌謡	2		田辺尚雄氏蔵
11	平曲時歌謡	2	寛政5 深美少左氏蔵	深美少左氏蔵
10	平曲時歌謡	2	寛政5 東家英治氏蔵	東家英治氏蔵
9	平曲時歌謡	1		平大附松林氏蔵
8	平曲時歌謡	2		愛田重立氏蔵 女子短大蔵
7	平曲時歌謡	2	寛政10	吉川英一氏蔵
6	平曲時歌謡	1	寛政10	東家英治氏蔵
5	平曲時歌謡	1	寛政10	岩間健太郎氏蔵
4	平曲時歌謡	2	寛政10	岩間健太郎氏蔵
3	平曲時歌謡	1	寛政10	岩間健太郎氏蔵
2	平曲時歌謡	5	寛政10	岩間健太郎氏蔵
1	平曲時歌謡	5	寛政10	岩間健太郎氏蔵
38	平曲時歌謡	2		
37	平曲時歌謡	1		
36	平曲時歌謡	1		
35	平曲時歌謡	1		
34	平曲時歌謡	1		
33	平曲時歌謡	1		
32	平曲時歌謡	1		
31	平曲時歌謡	1		
30	平曲時歌謡	2		
29	平曲時歌謡	2		
28	平曲時歌謡	1		
27	平曲時歌謡	1		
26	平曲時歌謡	1		
25	平曲時歌謡	1		
24	平曲時歌謡	1		
23	平曲時歌謡	1		
22	平曲時歌謡	1		
21	平曲時歌謡	25		
20	平曲時歌謡	5		

図8 平曲特別研究会展覧資料目録

の会期に合わせて行われた模様で、目録によると、出展者は、渥美かをる、石原金一、岩淵悦太郎、大野晋、岸辺成雄、金田一春彦、高橋貞一、田辺尚雄、富倉徳次郎、藤井制心、横道万里雄、吉川英士、愛知県立女子短大、早大内演劇博物館、東京教育大学、東京芸術大学で、合計38点の平曲が展示された。

この展観に岩淵悦太郎が資料を提供した背景には、国立国語研究所の非常勤^(注11)であった金田一春彦の働きかけがあった模様である。金田一(1997)の跋文によると、昭和27(1952)、28(1953)年から、30(1955)年のこととして、岩淵と平曲の関わり、東洋音楽学会との関わりを記している。

このころ、国立国語研究所が平曲の研究に動き出した。研究所の副所長岩淵悦太郎氏は若いころ平曲にちょっと関心をもっていた。私は国立国語研究所の研究員の肩書をもっていたので、館山師を東京に招き。「大原御幸」その他の演奏を録音した。…中略…昭和30年、東洋音楽学会で岸部氏が平曲を特集する研究会を計画し、私はその企画構成を委ねられた。私は少しでも多くの人を集めるために、理事をしていた国語学会にも呼びかけて二つの学会の合同の大会とした。(跋文)

こうしたことも含め、平家物語、平曲の研究者との研究上の交流は、研究所入職後のみならず、生涯続いていたことが知られる。

7. むすび

国語史研究者としての岩淵悦太郎について、「平家」(平家物語・平曲)に関する旧蔵書8種を手掛かりに、本稿で明らかにできたのは次のことである。

- I. 岩淵は、橋本進吉の昭和2年の講義「国語音声史の研究」を聴いたことが契機となり、国語史資料としての平曲の有用性に目覚めた。
- II. 岩淵は、音韻史研究の道に進むとともに、研究材料として平曲譜本の収集にもあたっていた。
- III. 岩淵は、国立国語研究所入職後は、職務上の必要性から音韻史研究者としての性格を次第に薄めざるをえなかったが、「平家」関連の資料収集は続けていた。
- IV. 岩淵は、「平家」については、自ら研究発表を行うのではなく、後進へ

の資料提供・情報交換という形で、間接的に学会に貢献する道を選んだ。特にⅢ、Ⅳについては、従来は研究所入職後の岩淵は個人的な研究活動をほとんど行っていなかったと見られていたために、これまで見過ごされていたところである。

以上の資料から判明する、研究者との相関図を示し稿を結ぶ。

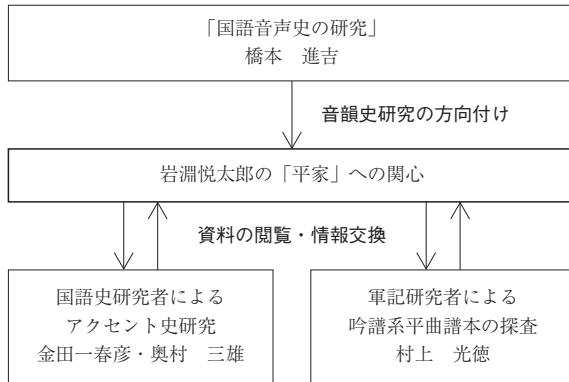


図9 平曲を軸にした研究者との関わり

注

- 1 福島県白河市本町35番地（旧43番地）の「渋木茶舗」は、店舗・土蔵等が岩淵悦太郎の生家である造酒屋・岩淵屋の一部であるとされ、岩淵屋の通い徳利も保管されている。
- 2 岩淵の国語史の研究業績については、築島裕（1978）に詳しい。また、岩淵の音韻史観については、岩淵（1960）が端的に示している。
- 3 岩淵悦太郎（1977）「まえがき」iiiページ。
- 4 同様のことは、岩淵悦太郎（1960）にも記されている。岩淵は、橋本進吉著作集第6冊の解説で「たまたま筆者は昭和2年に東大国文学科に入学し、「国語音声史の研究」の講義に親しく接することが出来た」（354ページ）と明記している。
- 5 岩淵匡によると「父の筆跡ではない」とのこと。稿者が岩淵文庫全体を調

査したところでは、岩淵悦太郎の書き込みが見られる資料は、青焼き複写を製本したものだけで、写本・板本には書き込みをするのではなく、紙片を挟む方法をとっている。

- 6 高野辰之（1876-1947）は、専修大学校歌・応援歌（大正15（1926）年）の作詞者。
- 7 奥村三雄（1981）ほか。
- 8 金田一春彦（1997）ほか。
- 9 上野和昭（2000、2001）ほか。
- 10 村上光徳は、同資料について昭和44（1969）年に「市立米沢図書館蔵 平志吟譜 木村本」と題する論文を発表している。
- 11 国立国語研究所（1978）に掲載の「国立国語研究所歴代職員一覧」によると、金田一春彦の在職期間は「昭和24（1949）年2月28日～28（1953）年3月31日」で、職名・所属は「非常勤（研究第1部第一研究室）」とある。

参考文献

- 岩淵悦太郎（1942）「平曲における入声ツの取扱ひ方」『皇国文学』4、1942年1月、六芸社〔のちに『国語史論集』（1977年、筑摩書房）に再録〕
- 岩淵悦太郎（1952）「平曲の語り本」『日本文学研究・平曲の総合研究』31、1952年3月、日本文学研究会〔のちに『国語史論集』（1977年、筑摩書房）に再録〕
- 岩淵悦太郎（1960）「日本語・音韻の歴史」『国文学 解釈と鑑賞』25-10、1960年9月、至文堂
- 上野 和昭（2000）『平家正節声譜付語彙索引』上、2000年、アクセント史資料研究会
- 上野 和昭（2001）『平家正節声譜付語彙索引』下、2001年、アクセント史資料研究会
- 奥村 和子（1991）「前田流平曲の史の変遷—国語史資料としての観点から—」『語文研究』71、1991年6月、九州大学国語国文学会
- 奥村 三雄（1981）『平曲譜本の研究』、桜楓社

- 岸辺 成雄 (1966) 「東洋音楽学会三十年小史」『東洋音楽研究』Vol.1966-19、1966年、東洋音楽学会)
- 金田一春彦 (1997) 『平曲考』、三省堂
- 研優社 (2014) 『研優社平成二十六年秋期古書目録』、2014年11月、研優社
- 国立国語研究所 (1978) 『国立国語研究所 三十年のあゆみ—研究業績の紹介—』、1978年10月、国立国語研究所
- 薦田 治子 (2011) 「『平家正節』の江戸伝播について」『平曲シンポジウム 譜本としての『平家正節』報告』、2011年11月、萩野検校顕彰会・愛知県立大学文字文化財研究所
- 柴田 武 (1978) 「『私が国語研究所である』—岩淵悦太郎の生—」『展望』236、1978年8月、筑摩書房
- 鈴木 孝庸 (2011) 「譜本としての『平家正節』—口伝とその視覚化—」『平曲シンポジウム 譜本としての『平家正節』報告』、2011年11月、萩野検校顕彰会・愛知県立大学文字文化財研究所
- 鈴木まどか他 (2007) 『平家琵琶にみる伝承と文化—平曲古今譚』『平曲続伝記』『平曲温故集』—』、2007年10月、大河書房
- 高木市之助ほか (1959) 『平家物語』上 (日本古典文学大系)、1959年2月、岩波書店
- 館山漸之進 (1910) 『平家音楽史』、1910年、木村安重
- 築島 裕 (1978) 「岩淵悦太郎の国語史研究」『言語生活』324、1978年12月、筑摩書房
- 中田 祝夫 (1955) 「平曲研究会の記」『国語学』21、1955年6月、国語学会
- 橋本 進吉 (1966) 「国語音声史の研究」『国語音韻史』(橋本進吉著作集第6冊)、1966年、岩波書店
- 林 四郎 (1978) 「岩淵悦太郎論」『言語生活』324、1978年12月、筑摩書房
- 村上 光徳 (1969) 「資料紹介 市立米沢図書館蔵 平志吟譜 木村本」『駒澤國文』7、1969年6月、駒澤大学
- 村上 光徳 (1994) 「資料紹介 市立弘前図書館蔵 平志吟譜」『駒澤國文』31、1994年2月、駒澤大学

村上光徳・鈴木孝庸（2007）『平曲吟譜—宮崎文庫記念館蔵平家物語—』、2007年、瑞木書房

山田 孝雄（1933）『平家物語』、1933年、宝文館

謝 辞

資料を御提供くださった岩淵匡先生に感謝申し上げます。